世界投資者週間オープニングセレモニーでの講演
「投資者教育の在り方」

講演：岡本　和久

2018 年 10 月 1 日に金融庁主催で世界投資者週間 2018 のオープニングセレモニーが開催されました。このグローバルなイベントは世界の証券市場当局の国際機関、IOSCO（証券監督者国際機関）が 10 月 1 日から 7 日を第二回世界投資者週間 2018 と定め、世界各地で投資者教育と保護に関するキャンペーンが世界中で開催されたものです。
日本は世界で最初に 10 月 1 日の朝がくる国です。そこで日本でオープニングセレモニーが開かれたのです。当日は金融庁に世界 13 か国から 80 名以上の方が参加されました。
セレモニーでは IOSCO のボスコ会長のあいさつに続き、金融庁の水口審議官からの歓迎の挨拶、日本証券業協会鈴木会長、金融広報中央委員会吉國会長のご挨拶が行われました。

(IOSCO ボスコ会長からのビデオメッセージ)

その後、私が「投資者教育の在り方」というテーマでお話しをさせていただきました。スピーチは英語でしたが、ここに日本語訳をご紹介します。

＜自己紹介＞
おはようございます。ただ今ご紹介をいただきました投資教育家の岡本和久です。私はファイナンシャル・ヒーラーとも名乗っていますがその理由については後ほどお話しします。

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
発行人：岡本和久、発行：I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
URL: http://www.i-owa.com；E-mail: info@i-owa.com

このような意義のあるグローバルな会議のオープニングセレモニーで講演させていただくことをとても光栄に思います。

今日は三つのことをお話ししたいと思います。

1. 年金運用で学んだこと、そしてなぜ投資教育を始めたのか
2. なぜ日本人は投資に消極的なのか、投資教育の三つの課題
   - 個人投資家が何を知らないかという知識の欠如
   - 生活者にとって資産運用が複雑すぎること
   - 資産運用を続ける耐久力の強化が十分されていない
3. 投資教育で教えるべきもっとも重要な二つの点
   - 人生の目的と人生の三つのステージ、それぞれのステージでどのようにお金と付き合うべきか
   - 200 パーセントのしあわせ持ちになるロードマップ

私は 1946 年に東京で生まれました。2 年間のニューヨークでの大学生活を含め、慶應義塾大学を 1971 年に卒業、日本の証券会社に入社しました。その日の日経平均は 2414 だったことを覚えています。1971 年に日本の証券会社に入り、最初の四年間は国際金融畑で東京とブラジルのサンパウロで働きました。

1975 年にニューヨークに転勤になり、その時から 15 年間、私の証券アナリストおよびストラテジストの仕事が始まりました。最初の 9 年間はニューヨークで仕事をしました。数多くの素晴らしいファンドマネジャーやアナリストの薫陶を受けたことはとても幸せでした。その後 6 年間、東京で同じ仕事をしましたが、これはまさにバブルの始まりからバブルの終焉までの期間でした。この経験もまた非常に私にとっては大きな財産となりました。

＜年金運用の世界へ＞

1990 年にご縁があって当時、年金運用の分野で急成長をしていたアメリカの資産運用会社から声が掛かりました。「東京でビジネスを開始したい」とのことで、私にその会社の社長をしてもらいたいというのです。サンフランシスコの本社を訪問して彼等の運用手法について学ぶほどにその素晴らしさに圧倒されました。まさに目から鱗が落ちるような気がしたものです。今までの 20 年近くの証券界での体験はここに至る道だったのだと確信しました。それで転職を決意しました。

折柄、マーケットはバブル崩壊後の暴落の時期にありました。ある意味、そのような非常に悪いマーケット環境が合理的な運用を提唱する私どもの運用手法に合っているという確信はありました。この確信ゆえにビジネスとしては非常に苦しい時期でしたが、ひたすら合理的な手法を訴え続けることができました。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

また多くの素晴らしいお客様とスタッフにも恵まれました。当初のビジネスは非常に苦しいものでした。グローバルのトップからは「初めてコンタクトしてから2年間ぐらいは契約を結んではいけない。その期間に十分、お客様に運用手法を理解してもらい、その上で契約を結ぶのだ」と言われていました。

90 年代中頃から徐々にビジネスが拡大し始め、2000 年にかけて成長が加速しました。2005 年には幸いなことに年金運用分野で投資顧問会社として日本最大となることができました。徐々に「この会社における自分の仕事は終わった」という気持ちが大きくなってきました。「自分が育てた会社ですから、これ以上、強く、大きくなってほしい」そのためには、トップにいるものが満足感、達成感を持っていてはよくない。そういう思いが強まり、2005 年に私はその会社を退職させてもらい新たな事業を自ら起こしました。

＜起業＞
日本の人口構成を考えると、これから一般生活者が正しい資産運用をしていくことはどうしても必要であると思いました。しかし「誰もそのような正しい資産運用の方法を教えていない」というのが大きな問題であると思っていました。そのようなことから私は投資教育をその事業とすることに決めたのです。それが I-O ウェルス・アドバイザーズです。「I」はインサイド・ウェルス、「O」はアウトサイド・ウェルス、つまり、物心両面での幸福感を最大化するためのアドバイスを与えたいという気持ちを社名に込めました。

投資教育を選んだもう一つ背景があります。年金運用をしていた時の体験です。どのように素晴らしい運用手法であっても一つの運用戦略がマーケットの中でずっと良いパフォーマンスをもたらすことはありません。短期的にはうまくいくときも、うまくいかないときもあります。本当のパフォーマンスは長期間にわたって運用戦略を続けてもらうことで得ることができるのです。

そのためには、お客様に運用哲学や手法について深く理解をしてもらい、その信念を運用会社との間で共有し、マーケットの環境がその手法に適している時も、適していないときもずっと続けてくれるということが最終的に本当に良いパフォーマンスを生むことになるのです。つまり運用をする側はお客に対してその運用哲学と手法を徹底的に理解してもらうことが絶対に必要です。それはまさに投資教育であると私は考えました。

＜なぜ日本人は貯蓄が好きか＞
日本の家計部門は 2018 年 3 月時点で 1829 兆円（約 16.6 兆ドル）の資産を持っています。その保有する膨大な資産の約 8 割を現預金あるいは保険や年金などで保有しています。株式の保有比

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

率は 11%、投資信託は 4%ほど、合計して 15%と極めて少しです。これは米国では株式・投資信託が 5 割弱、現金・保険・年金が 4 割強です。ユーロエリアについてはちょうど日本とアメリカの間ぐらいと言えるのでしょうか。

なぜ、このようなことが起こっているのでしょうか。さまざまな文化的な要因もあると思いますが、80 年代ぐらいまでは日本は幸いなことに経済もそれなりに成長し人口も少しずつは増加をし、しかも社会保障制度もしっかりしていました。また雇用体系も年功序列制度や終身雇用制度がありました。そのようなことから多くの人々は将来のことは、国と企業に任せておけばあまり考える必要もなく退職を迎えることができたのです。

しかし、そんな時代はもうすでに終わっています。社会経済の環境が非常に大きく変わったのです。それにもかかわらず、多くの人が相変わらず昔のままで「何なんとかなる」という根拠のない楽観を持ち続けているのです。

＜本当に必要なこと＞
ですから私は日本の場合、最も重要なことは「年金だけでは退職後の生活は成り立たないのだ、将来の自分は今の自分が支えるより仕方がないのだ」ということを生活者に理解させることだと思います。それが投資教育の前提となる知識です。株式は投機の道具でまともな人間がすることではない。博打の一種であると多くの人が思っています。資産運用のニーズを感じていない人々に投資教育を押し付けようとするほど抵抗感が強まります。ですから、私は一番、重要なことは一般生活者に「なぜ資産運用をすることが人生を考える上で大切か」を知ってもらうことだと思っています。

＜三つの課題＞
金銭・投資教育を続けていくほどに現在の投資教育の在り方について三つの問題点を感じるようになりました 。まず第 1 に投資教育を行う側が、個人投資家が何を知らないかということをあまりに知らなすぎるということです。投資教育を強化しなければならないということで有識者会議などが開かれます。金融業界の代表や学会の先生方が集まって議論をされています。

それぞれ立派な専門家ですが、多くの方が投資に縁のない生活者が何を知らないかを知らないのです。そこに投資教育がなかなか普及しない大きな理由があるように思います。本当に必要なのは有識者会議ではなく、無識者会議なのです。

投資教育というのは難しい資産運用の教科書に出ているようなことを教えることでもなければまた株価ゲームに習熟してもらうことでもありません。我々の生活の中でお金というものがどのような働きをしているのか、株式会社がどのように成立しているのかというような本当に基本的なことをまず十分に理解してもらうことが私は必要だと感じています。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

2 番目に重要なことは個人投資家が無理なくできるように運用の方法を究極までシンプルにしていくということです。私は現在、年金の運用で用いられている運用手法は極めて精緻なものであり非常に合理的なものであると思っています。しかしそれは個人の投資家にとってはあまりに複雑すぎるものです。

退職後のための口座も種々ありそれぞれ要件が違います。銀行や証券会社で口座を開設するのも極めてハードルが高いのです。投資商品もたくさんあり、投資情報も極めて多様です。これらをもっとシンプルにすることが投資教育の前提として大切なのではないかと思います。

退職後のための資産運用というのはちょうど歯磨きのようなものです。毎朝、毎晩、歯磨きをしますがそれは決してエキサイティングなものでも楽しいものでもありません。しかしそれをきちんとしておかないと年を取った後に困ったことになる。

人生を通じての資産運用というのもちょうど同じようなものだと思います。資産運用を行っている本人が、あまり運用しているという意識を持たないでも退職後のための資産が準備されているというような運用手法が理想的なのだと思います。銘柄選択能力も、株価見通しも、経済予測も、不要な資産運用の方法をもっと広める必要があるだろうと思っています。

そして 3 番目に実はこれが最も大切なことではあるのですが、続けるということです。多くの方が、一時的に株価が暴落をしたりするとせっかく積み立ててきた投資を止めてしまう方が多いのです。どうせもっと下がるからその下がった時に買えばいいそう思うのです。また逆に株式市場が大幅高をしたりするとつい利益を確定したくなる人も多いのです。また、しばらくすればどうせ下がるからその時にまた買い直せばいいそのように考えてしまうのです。

しかし容易に想像がつくようにそのような思惑はほとんどうまくいきません。誰も株価の先行きなどは予測することができないからです。私は過去 10 年以上にわたってファイナンシャル・ヒーラー®を名乗っています。それはまさに、長期投資の長旅において出てくる種々のストレスに負けないように「癒し」を与えることこそ自分の役割だと思っているからです。癒しによって長期投資が可能になるのです。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

＜人生の目的＞
2005 年に投資教育の会社を起業して以来、数多くの個人投資家の皆様とお会いして話を伺ってきました。セミナーでは、私はまず参加者に皆さんに生きている目的は何ですか人生の目的は何ですかと問いかけます。多くの方があまりはっきりと答えることができません。

お金持ちになることが人生の目的ではありません。また出世することが人生の目的でもありません。人生の目的はしあわせ持ちになることであります。それではしあわせ持ちの人生には何が必要なのでしょうか。

私は以下の六つがそれらだと思っています。お金は大切です。しかし、お金だけではしあわせにはなれません。それに加えて健康、家族、友達、趣味、そして社会貢献です。これらの六つの要因を六角形の頂点に描きます。そして、六角形ができるだけバランスが取れていて、しかも外側に大きく広がっているのが望ましいのです。もちろん、他の要素と同様、お金もとても大切です。お金があれば生活の自由度が高まり、そして困っている人や世の中のためにお金をどんどん使って行くことも可能です。

＜100 年人生＞
私が最近、セミナーでお話するのは「お金とこころ、200%のしあわせ持ちになれる人生のロードマップ」というテーマです。今人生は 100 年を視野に入れたものになりつつあります。私は 100 年の人生を三つの期間に分けて考えています。

最初の 1/3 が学びの時代です。次が 30 代に入ってから 60 代中頃ぐらいまでの働きの時代です。そして最後の 1/3 が遊びの時代です。

学びの時代というのは人的資産の形成期です。

働きの時代は学びの時代に形成された人的資産を金融資産に変換していく時期です。つまりこの時代は人的資産の活用期であり金融資産の形成期なのです。

そして最後の遊びの時代は働きの時代に形成された金融資産を活用していく時期です。遊びというのは自分が本当にしたいことをするとそれが世の中のためになるという生き方です。この時代は次の世代に人間としての生き方を、ロールモデルを見せる時代です。

これが次の時代の人的資産の形成につながっていくのです。私はこの三つの時代それぞれにおいてどのようにお金と付き合っていくかを教えていくことが重要であると考えています。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

金銭・投資教育は人生という枠組みの中でどのようにしたらそれぞれの人が幸福感を最大化できるかという視点で行われるものでなければならないと思います。またこの三つの時代を追ってのお金との付き合い方は、今まで金銭教育や投資教育を受けたことのない大人の人に対してどのように金銭投資教育を行っていくかの段階でもあると言えます。

＜学びの時代＞
まず学びの時代における金銭投資教育についてお話をします。私が行っているハッピー・マネー®教室では最初にお金とは何かということを解説します。子供達がお金に対して持っているイメージはあまり良いものではありません。お金は汚いもの、お金持ちは悪い人、そのように思っている子供もたくさんいます。子供だけではなくて大人にもそのような人は多いと思います。

しかし、なぜお金が大切かということを考えてみると、お金がないと自分の欲しいもの必要なものを手に入れることができません。欲しいもの必要なものが手に入れば当然ありがたいと思います。ということは、「お金は感謝のしるし」なのです。

感謝の心があるから自分が額に汗をして働いて稼いだお金を相手に渡すのです。お金は感謝のしるしであるならば、お金を稼ぐためにどうしたらよいかも簡単に分かります。つまり人に感謝をされることをすればいよいのです。世の中のためになること、周りの人がありがたいと思うこと、それをすることによってお金を得ることができるのです。私は仕事というものは金銭的な要素もありますが、同時に社会貢献でもあり、また自分にとっての楽しみでもあると考えています。

さてそのようにして稼いだお金をどのように使うのが一番よいのでしょうか。私はアメリカ生まれのピギーちゃんという教育玩具を使って ハッピー・マネー®四分法を教えています。しあわせ持ちになれる四つのお金の使い方は、「使う」「貯める」「譲る」「増やす」です。言い換えれば「消費」「貯蓄」「寄付」「投資」です。

「使う」というのは今の自分のための消費です。「貯める」というのは少し先の自分のための消費です。本当は使ってしまいたいお金を我慢して貯めていくことによって大きな物を買い大きな喜びを得ることができます。我慢のご褒美は大きな喜びなのです。貯めるという行動で時間価値を学ぶことができます。「譲る」というのは自分のための支出ではなく、困っている人のため、世の中のために行うお金の使い方です。

最後の「増やす」というのはいわゆる投資です。今すぐ必要としないお金を、今、お金を必要としている企業に使わせてあげる。その企業はお金を出してくれた人に代わってそのお金を活用し、良い世の中を作るため、人々の役に立つための仕事をしてくれる。そしてみんなから受けた感謝がその企業の収益となり、その収益の一部がずっと将来自分の元に戻ってくる。これが本来の投資というものです。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

このハッピー・マネー®四分法によって子供達の意識は今の自分という小さな箱の中から飛び出して、少しずつ将来のことも、世の中のことも考えることができるようになります。学びの時代にお金の本質が感謝のしるしであるということ、働くということは人から感謝されることであること、そして稼いだお金を ハッピー・マネー®四分法の「使う」「貯める」「譲る」「増やす」という使い方をする。これはぜひ子供のうちに教えておきたいことですし、またこれまで金銭投資教育を受けていない大人の方も学んでいただきたいことだと思っています。

＜働きの時代＞
こうして人生は学びの時代から働きの時代へと移行していきます。働きの時代の主な目的は懸命に働き、収入を増やす。そしてできる限り節約をして、将来のための投資に資金を回していくことです。

20 代中頃から仕事を始め、60 代中頃、あるいは人によっては 70 代まで働いたとしても 100 年という人生を考えるとかなりしっかりした経済基盤の準備が就業中に必要です。一番大切なことは 現在受け取っている給料は現在の生活費であると同時に退職後の生活費でもあるということです。退職後の生活費のためにたくさんの資金を現在の給料から取っておけば現在の生活が苦しくなります。ですから今は少額でも退職後の生活費は長い時間をかけて大きく増やしていくことが必要なのです。

金銭面で退職後の最大のリスクは、私は生活水準の大幅な切り下げであると考えています。このリスクを回避するために必要なことは単に資産を物価の上昇率並みに増やしていくのでは足りないのです。物価の上昇率＋アルファのリターンが必要です。株式市場のリターンは民間企業の生み出す付加価値から発生します 。

私は非常に単純な資産運用の方法として「グローバル株式インデックスファンドをできるだけ若いうちから積立投資を行い、リタイアしてお金を必要とする時まで絶対にそれをやめない」ということを提唱しています。

資産運用の方法としてはこれだけです。難しい投資の理論も勉強も必要ありません。ただ毎月の出来事として積立投資をひたすら続けていくそれだけのことです。マーケットを見て一喜一憂する必要もありません。むしろ見ない方がいいのかもしれません。私はこの方法は現在年金運用で行

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

われている非常に精緻な運用手法と整合性があると思っています。理論的にも健全でありかつ実証的にも効果があるということが言えます。

＜遊びの時代＞
最後は遊びの時間のお金との付き合い方です。就業中から積み立ててきた全世界の株式インデックスファンドに加えて、退職時に受け取る退職金を公社債投信に投資をすることで全体のバランスを取ります。遊びの時代の資産運用で一番大きな課題はどのように資金を引き出すかです。いろいろな考え方がありますが、私は非常にシンプルな方法をお勧めしています。

例えば 100 年間の人生であると考えます。その場合には前年末の資産の時価残高を 100 マイナス現在の年齢、つまり百年人生を前提とした場合の余命年数で割ればいいのです。その金額を基本的には株式部分を売却することで引き出せばいい。次の年には前年の株式部分のパフォーマンスも考慮して 1 年少ない余命で割ればいいのです。基本的には資金の取り崩しは株式部分で行っていきます。

もう一つ高齢になればなるほど考えていただきたいのは超長期の株式投資です。自分が死んだ後も自分の代わりに世の中をより良いものにしてくれるような企業に投資をするのです。直接の子孫がそれを受け継ぐかもしれませんし、あるいは NPO 法人や信託などを使うことも考えられるでしょう。

大きな金額である必要はありません。100 年、200 年後を考えて本当に世の中の役に立つような企業を選ぶのです。その場合に大切なことは現在の株価ではありません。短期的な業績でもありません。その企業が持っている文化、つまりミッション 、組織や人材、コアになる技術などが本当に重要な選択の基準になります。

またこれは株式投資に限ったものではありません。寄付という形で自分の死後もお金に生きてもらうことが可能になります。その意味では投資と寄付は非常に似ている部分があります。どちらも人間の一生をはるかに超えたお金の使い方です。

＜しあわせ持ちへのロードマップ＞
我々は幸せ持ちになるために今日を生きています。毎年、毎年、誕生日が来るたびに、「ああ、また 1 年間とても幸せな時を過ごせたな」と思います。そしてその幸福感を背中に背負った幸せ袋に入れるのです。そのように暮らしていくことによって、死ぬ時に最も幸せになるような人生が送れるものと思っています。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

お金は人にご縁のネットワークを気付かせてくれます。投資は人に時間をどのように使うのが良いのかを教えてくれます。つまりこれは生き方です。お金や投資のことを学んでいくことによって人間はご縁のネットワークの中でどのように生きていくのが最も幸せになれる道なのかを知ることができるのです。まさに投資教育というのは生き方の学びであるということができると思います。

ご清聴ありがとうございました。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社